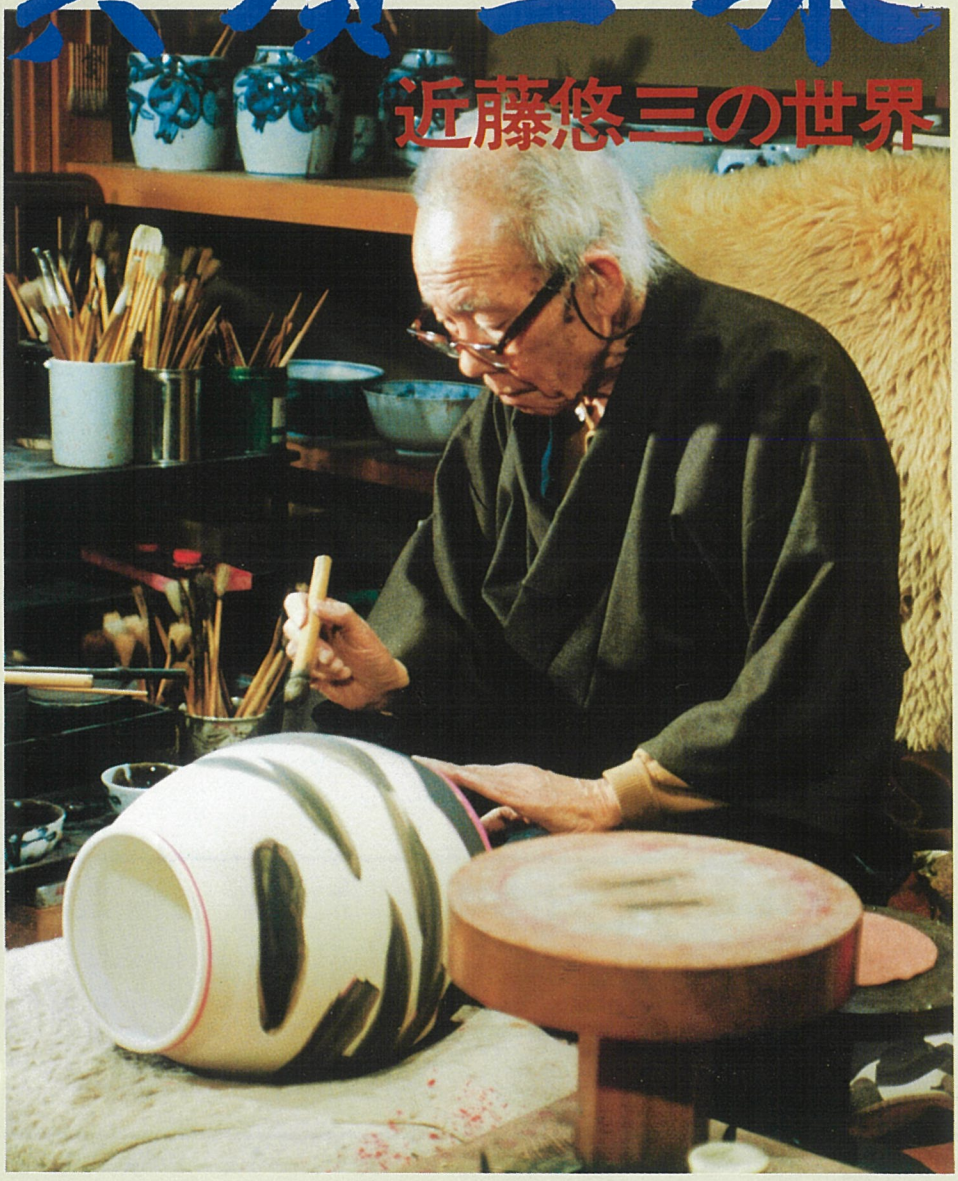
呉須三昧

近藤悠三の世界

文部省選定
教育映画祭最優秀作品賞
文部大臣賞



●企画
㈶ポーラ伝統文化振興財団
●製作
㈱桜映画社

●16㎜カラー32分
●定価—190,000円

山噴煙染付金彩壺

●映画『呉須三昧』によせて——陶芸評論家 南 邦男

冒頭先ず、回転する轆轤の上の大壺の成形にとり組む今年八十一歳を迎えた重要無形文化財保持者・近藤悠三氏の気魄のこもった掛声に驚かされる。

近年はテレビやVTRなどの普及によって、伝統工芸の映像による紹介や記録に接する機会が多い。また、一人の芸術家をとりあげてその人間像をドキュメンタルなタッチで追求した記録映画も、必ずしも少くないと思う。しかし、この『呉須三昧』のように、近代陶芸の歴史を背景に、独自の染付に生きた近藤悠三氏の今日に至る軌跡を、その作陶の実況と生(ナマ)のことばを最大限に生かし、雄渾な代表作の数々、古びた数葉の貴重な写真、ゆかりのある美しい風景のショットなどを巧みに点綴させて、これほど興趣に富んだ映画にまとめたものは珍らしい。特に、あらかじめ用意されたものではない近藤さん自身の心情の表白が、深い感銘を呼びおこす。言ってみれば、近藤さんの人間的な魅力と映画的な構成力が、この映画をありきたりの伝統工芸の記録映画に終らせなかった要因であろう。

◉かいせつ

近藤悠三は昭和52年に重要無形文化財保持者、いわゆる人間国宝に認定された、陶芸界の第一人者のひとりである。その作品は独自の力強い染付を特色とする。染付とは、陶磁器の白い素地に呉須と呼ばれる酸化コバルトを含んだ顔料で模様を描き、透明な釉薬をかけて焼いた藍色の模様のやきものである。

この映画は、この染付ひとすじ、呉須ひとすじに、やきもの人生を歩んできた近藤悠三の技と、自ら語るそのみがきぬかれた芸術論、人生論を記録したものである。優れた師との出会い、職人から創作家への開眼、独自の世界の探求と、近藤悠三の歩いてきた道は、現代日本の美術工芸に対する理解を深めると共に、人間としての生き方を考える上で大きな示唆を与える作品となっている。

◉あらすじ

明治35年、京都の清水に生まれた近藤悠三は、小学校を出るとすぐ五条坂にあった京都市立陶磁器試験場付属伝習所の轆轤科に入った。やがて奈良の安堵村で陶芸の仕事をしていた富本憲吉の助手になったのは、大正10年、19歳の時である。

若い頃の一時期、志野をやり、青磁をやり、白磁やルリも、何でも一通り手がけているが、世に「近藤染付」と呼ばれる独自の染付が生まれたのは40代になってからである。この染付に赤絵や金彩を加える工夫を始めたのは50代の終わり頃からで、金彩が加わったことでまた新しい境地がひろがったといえる。

近藤悠三は80歳を越えた今日でも大きな作品と取り組み、創作意欲は少しも衰えを見せていない。今は、富士山を主題にした新しい仕事に取り組んでいる。いつも一生懸命いのちをかけてやってきたと語る近藤悠三は、老いてますます若々しい。

人と作品の見事な一致

湘北短期大学教授 **有光成徳**

◉

『呉須三昧』から、二つのことを学んだ。

染付磁器ひと筋に仕事をしてきた近藤悠三の作品と作風の変遷がよくわかるということ。晩年の富士山への挑戦も、それまでの足跡からの必然の帰結のように思われる。

その二は、彼の根性と人柄から受ける、なんとも言われぬ親しみである。小学校では図画や手工が一番へただった彼の、その後の努力。師匠の富本憲吉から「作家になるのだったら陶器以外の勉強をしなさい」と言われ、それを忠実に守った彼。中期、後期の作品はすべて、近藤悠三その人が作品化されている、という感じ。

◉

◉製作スタッフ

脚本・演出　村山正実
撮影　村山和雄
照明　浅見良二
　　本橋俊男
　　長坂　潔
音楽　長沢勝俊
解説　相川　浩
製作　六鹿英雄
　　村山和雄

◉撮影協力

東京国立近代美術館
京都国立近代美術館
富本憲吉記念館
河井寛次郎記念館

◉近藤悠三略年譜

明治三十五年
京都市清水に生まれる。

大正三年
京都市立陶磁試験場附属伝習所轆轤科に入学。

大正六年
同所卒業。助手として勤務。
（河井寛次郎・浜田庄司も勤めていた）

大正十年
奈良安堵村の、富本憲吉の助手として勤務。

昭和三年
第九回帝展に「呉須薊文かきとり花瓶」を出品、初入選。
以後十三回出品、連続入選。

昭和十四年
第三回文選で「柘榴土焼花瓶」特選。

昭和三十一年
第三回日本伝統工芸展で「山水染付壺」最高賞受賞。

昭和四十年
京都市立芸術大学学長となる。

昭和四十二年
イランに渡る。
ペルシャ風の焼物を作陶。

昭和五十年
有田で「梅染付大皿」完成。

昭和五十二年
重要無形文化財保持者（人間国宝）としての認定を受ける。

昭和五十八年
「富士山」主題の連作を中心に、東京・大阪・京都などで個展開催。

◉

株式会社 桜映画社　〒151 東京都渋谷区代々木1-57-1 代々木センタービル　TEL 03(3320)6311 FAX 03(3320)7666